

この本は、フッサールの著書や他のフッサールの研究者の論文などに触れながら、筆者が自身の考えを構成していく内容を持つものとして読むことができる。そういう意味では、『現象学とは何か』という書名は的確なものかもしれない。単なるフッサールの入門書とか解説書ではないと感じた。

「」内は、原則としてF等、登場する哲学者の言葉。文は、場合により短縮または順序の入れ替えなど、簡略化してあるのでご了承ください。

第二章 発生的現象学とは何か

二、受動性の現象学一経験の分析一

1 先コギトからコギトへ

・コギト、(詳しくは対象へ向かう自我の能動的な対向)の成立に先だって、すでに、対象意味の自己構成とよばれる先コギト的現象の層が見いだされ、それをフッサール（以後F）は受動性の現象として扱い、主題的な精密な研究を捧げている。 p89

（受動性の研究：1920頃始まる。現象学の転回に寄与。『経験と判断』）

・明らかにされたことは、対象の構成に関する意識の機能が大きく能動性と受動性に分けられていること。（さらにそれぞれ二段階ある 受動性：受動的原志向性・触発、能動性：受容的な自我対向・自發的な高次作用 三項目について以下で解説） p90

受動的原志向性

・先所与性の領野において内在的合法則性の現象が見られるということである。・・・ヒュレーハ、まだ対象とはいえないにもかかわらず、・・・すでに一定の構造と分枝化を有している。つまり、ある意味で、すでに対象意味としての統一性をもっている。Fは、この統一を受動的総合として捉え、その機能に連想の名称を与えた。

・意識の対象構成の根源的機能は、時間意識の根源層のうえにそれを踏まえて働くこの連想機能においてはじめて営まれるとみてよい。・・・時間の根源的機能が実際にはこの連想機能として働くということをも意味する。 p91

・連想は「意味の親近性の現象」であり、意味内容が相互にさまざまの統一を起こす働きである。かつて意識によって能動的に構成された意味が・・・ふたたび新たに喚起され、たがいに合致総合を起こし、自らを統一体として総合する。

・等質的なものはたがいに融合を起こし、異質的なものに対しては対照を形づくり輪郭を形成する（両者の間には種々の程度性が成り立つ）。・・・個別的な意味が、意味の領野から自己を統一することによって自己を際立たせ、自己を浮かびあがらせてくる。 p92

・「受動的先所与性の領野としての知覚の領野は、すでに総合的合一により、多くの意味領野の相互関連によって構成されている」。だがこの受動的統一は決して本来の意味における対象ではない。「連想はいかなる対象も作らない」。（あるものが対象であることができるの、連想を基礎にして、・・・超越論的自我論的能動性を必然的に前提にしている）。

・先所与性、つまり意識に先立って与えられるものがすでに意識の深層において、しかも現在の意識の場において、対象化の働き以前に受動的に総合されていることが分析的に発見された。

触発

- ・この受動的に構成された意味の統一は、自我への触発的傾向をもつ。・・・背景より浮かびあがってくる意味の統一は自我に向かって浸圧力を有し、これに対して自我は「触発されている」という関わりかたをもつ。 p93
- ・この触発的傾向に自我が応諾するときに、受動的傾向は能動的コギトに転化し、自我は客体に向かって能動的に対向する。（自我は、つねに潜在性として目覚めている=まちうけている。触発は、時間的に先行しているわけではなく、対向と同時に対応しあっている。触発と志向は一体になっている。）

自我の能動的作用

- ・コギト=自我の能動的作用は、触発的傾向への自我の応諾として起こる（客観的構成として十分に意識されて遂行されるコギトである）。
- ・（この能動性は、）すでに構成された意味に自我の目を向けることである（しかたがって受動性と対立していない）。触発への応諾としての自我の働きは、受動的性格を免れえない。
- ・対向は経験の開始点。対象への関心があつてはじめて対象への連続的な経験の連関が成り立つ。同一の対象を、対象のたえざる新しい現れかたをとおして、さらに規定し続けていこうとする対象視向の態度が発生する（Fは関心と名付ける）。 p94

2 知覚における地平の現象

- ・Fは、知覚を選んで分析する。知覚が本源的な明証の意識であり、他の変容された意識の原型を示しているから。高次の意識的態度に対して基底的な働きを持つこともその理由。 p95
- ・（知覚が、いろいろの態度の基礎におかれるのは）対象の同一性を保ち続ける働き、対象の存在の信念が知覚に見られるから。
- ・Fは知覚を三種類に分ける（端的考察的知覚（把握作用）、表明作用、関係づけ作用）。 p96

端的考察的知覚

- ・意識作用の受動的現象をFは、「まだ捉えて保っていること」とよんでいる。端的な知覚は、ひとつつの対象を知覚し続けていく体験である。それ自体「内在的時間的統一」をもつ。（この時間的統一によって）ひとつの対象が多様な現出をとおして、ひとつの対象として把握される。
- ・（音を聴く場合）音は、時間の流れやその響きの位相の連続的变化をとおして、連続的に同一性を保つ（「いま」の時点、連続的な過去の地平、未来地平をもつ具体的現在のなかであらわれる）。把握作用はこの変化する現在をとおして統一としての音に向かっている。（音の要素をとおして音に向かっている。）
- ・ひとつの同じ対象へと向かわせ、恒常に自己合致を行いつつ能動性の統一的連関を形成されるのは、「なお捉えて保つ」という一種の受動性の働きである。 p97
- ・このような能動的-受動的な「捉えて保っている」現象に基づいて、知覚対象は持続する対象として把握される。この受動性は、連想的受動性とは異質。作用のなかに働く受動性である。そこに経験の連関が形成される。
- ・つぎつぎに対象を取り換えるときにも、この保持的受動性が働く。Fは、同一性対象に関わる受動性を印象的受動性、関心交替の場合を非印象的受動性と呼ぶ。ただし、純粋な時間（[内的な]根源的な時間）の流動的な現象である「把持」とは区別される。
- ・（[この時期のFは根源的時間を]自我の一切の作用が従わねばならない流れと見ている。ということは、）受動性は実際に意識が活動するときに起る時間の意識浸透的機能といえるものであ

り、この「なお捉えて保つ」の現象も「<なお>の様態における現実的能動性」であり、・・・「現実に発動している成分」なのである。 p98

表明的知覚

- ・(上述の) 把握作用はひとつの対象について連続的連関を形成するが、表明作用は、対象をその固有性質とか部分契機によって規定していく知覚体験である。
- ・対象を考察するとき、その対象への期待が働く。この期待は、すでに知っているという予料的志向である。この予料的志向が対象への規定として働く。そこに対象の内部地平が予料地平として現象してくる。
- ・(たとえば) 対象Sが、色とか形についての内部規定 α 、 β によって規定されるとすると、「Sの把握から α 、 β などの把握へといたる全過程から、われわれはSを知り学んでいく。全過程は展開(表明)する考察であり分岐化された考察の統一である」。
- ・われわれは契機から契機へ、部分から部分へと一步ずつ把握していく。契機や部分は固有性質の規定である。固有性質の把握において、われわれは対象を知り学び、固有性質を対象の固有性質として知る。 p99
- ・不規定期的主題Sは、展開において現出してくる固有性質の基体となる。固有性質は対象の規定として構成される。(赤い小さい花を「赤」「小さい」という固有性質によって規定する)
- ・表明作用は対象をその規定において展開していくことである。
- ・Fは、表明作用を論理的意味形式において「基体」と「規定」の関係として捉え、表明作用は、総合過程ではあるが、論理的カテゴリーの原初的な発生位置をそこに見ることができると言っている。
- ・表明的総合は、同一的物の多様な現出の連続的総合とは異なる。表明作用における基体と規定は相関項として構成されている。規定は基体のもつ同一性をもたず表明辞にすぎない。
- ・表明作用は、各部分把握をとおして全体を把握する働きであるが、対象(全体)へと向かう能動性は、個々の規定作用としての能動性が働くときに、様態を変様して保たれ続ける(「なお捉えて保つ」受動性の現象)。表明作用の続くかぎり、Sへの能動性は受動化しつつ保たれる。

p100

- ・もうひとつの受動性である連想は、この場合(表明作用において)どう働くのか。
- ・対象を規定していく表明作用の過程において、この規定作用は予料として働く。対象は、独立したものではなく、類型的にすでに親しまれ、予め知られた地平をもっている。連想が予料へと働いているからである。対象の類型的予料の地平は流動的であり、予料は充実されたり修正されたりしていく。知覚の連続的連関は、地平(予料)志向の充実過程である。
- ・体験そのものは根源的に「いま」の様態で現れるが、「いま」は「把持」へと移り、次第に消え、忘却される。しかし、消滅するのではなく、潜伏的になっている。いつもつねに連想によつて呼び出されるのを待っている。
- ・対象の表明作用は、予料地平を伴うことによって連想の働きかけを受け、対象を既知のものとして志向しているのである。 p101
- ・新しく構成された意味はふたたび新しい習慣知となる。経験は習慣のなかで新しく習慣を作り続けること。習慣の反復によって既知性の度合が深まり世界は馴染みを深めていく。

関係づけ作用

- ・目の前の家は垣根や庭木とともに目に映る。多数対象の所与は、ひとつの対象が他の対象とともに触発してくることである。(隨伴的所与)

- ・関係知覚とは、知覚関心を対象の外部地平へと入れ、対象を他の対象と関係づけて、より詳しく規定していく知覚のこと。
- ・外部地平は自我の対向を誘発するほどではないが、隨伴的所与は、各対象がまえもって与えられる類型的予知性の地平を提供する。
- ・関係づけ作用における対象の規定は相対的規定と呼ばれ、かならずしも知覚対象である必要はない。（たとえば知覚対象と想起対象または想像対象との間にも成り立つ（そのためには、能動的作用に先立って、同等性と類似性の関係が受動的に成立していかなければならない）。 p102
- ・関係づけ作用は、多数の対象をつぎつぎに把握していく集合的総括作用とは異なる。あくまで主要主題との関係において別の対象に目を転すことである（順次的ではなく、二重視向）。たとえば、「ペン軸」が主要主題で、視向が「鉛筆」へ移るとき、前者を「より太いもの」と規定していく。
- ・直観の統一の二つの仕方 Fは、「同等性と類似性による合致統一としての直観野の統一」に対し「同時性と継時性による（連想による）直観統一」をより根源的なものとしている。 p103

3 直観の二つの統一

知覚における直観の統一

- ・知覚において、多数の個体が「意識のいま」において同時に触発するものとして与えられることができるのは、直観の統一が根底に成り立つからである。 p104
- ・ひとつの個体が与えられるときは個体が根源的に時間的に構成されている。多数個体があたえられるとき、それらが同時性または順次性の機能で統一されている。
- ・知覚における直観は、能動的作用による客観化以前に、感性的、受動的に統一されている。
- ・対象の所与の統一性は、時間の個体構成的機能によって説かれている。この時間は、意識時間ではなく「対象意味に共属する客観的時間」である。
- ・時間は「包括的連續体」として、ひとつの持続そのものである。あらゆる対象は持続するものとして、持続の個別化によって個別体として構成される。
- ・つまり持続としての時間は時間形式としての自己を個別化することによって、時間質料の個別化の制約となる。ということは個々の対象は、ひとつの時間の内部でそれぞれ固有の時間位置を占めることによって、ひとつの時間の内部へ組み入れられるということである。
- ・「時間形式は、個体持続する個体があるかぎり、個体の形式であるばかりでなく、時間形式は、またさらに個体を結合された統一にまで合一する機能を持つ。だから多数個体の知覚の統一は、結合していく時間形式を基礎にした統一である」。（ただし、この個体構成の時間論は20年代のみ）
- ・ところがこの時間は、知覚体験の主観的時間ではなく、「対象意味に共属する客観的時間である」。（この）対象的客観的時間の形式が、知覚の直観の統一を可能にさせるというのである。この時間の働きは、知覚の周囲的世界と想起された対象の周囲世界、さらに「他人の語る想起的周囲世界」までも、ひとつの世界に属させる（「相異なる想起的周囲世界のすべては、ひとつの同一の客観的世界の部分にすぎない」）。 p105
- ・知覚や想起とかの対象は、所与されるかぎり「現象的時間」を持つ。ともに客観的時間をもつことによって、ひとつの世界に位置付けられ、客観的世界に確固たる時間位置を有し、そのことによって統一づけられる。
- ・時間は、「最初の形式であるとともに根本の形式」であり、あらゆる形式の形式であり、その他のすべての統一を創設していく結合形式の前提である」。

・ここで客観的時間と言われるのは、客観的に構成された時間という意味ではない。・・・意識の能動性以前に意識時間ではないこの自然時間が意識の場において意識作用の前提として働くことを言っているのである。 p106

・時間が、意識直観において受動的に機能することを示したのは『経験と判断』においてのみである。Fは、この分析を現象学の学としての自己規定に生かしえなかった。（最後期の時間論は、先時間的「現在」を説く。）

連想による直感の統一

・（しかし）想像対象は、この（以上のような）連関には組み入れられない。「想像対象性には絶対的時間が欠如している」。現実のように根底に絶対的時間秩序が存在していない以上、ひとつの想像意識の直観統一、または任意の二つの想像意識の間の連関が成り立つためには、同等性と類似性の関係に基づくことだけが残されている。 p107

・知覚対象と想像対象の間には、客観的な連関は成り立たない。しかし、直観の統一は成り立つ。根底に、内的時間意識による時間対象の構成を踏まえて、連想が働くからである。

・あらゆる対象は「内的時間意識の流れのなかで、集められ構成されていること」を基礎として、連想の機能によって統一される。

・「等しいもの」は「等しいもの」を、「似たもの」は「似たもの」を連想的に喚起し、生動的でない過去の意味を生動化していくことによって、意識が措定的であるか非措定的であるかにかかわらず、すべてが受動的に関連づけられ統一される。

・連想による直観の統一は、受動的客観的時間の統一より「広い意味における直観の統一」である。この直観（連想による直観）の統一は、「直観的対象意識の統一」であり、「相関項として、対象性の直観的統一をもつ」。

・（したがって）「時間直観の統一は、すべての時間客觀である・・多数の客觀に対しての直観のそれぞれの統一の可能性の制約である」。

受動的結合の本来の意義

・連想による直観の統一は、同等性、類似性の関係、つまり比較関係の基底を形成するが、現実性関係を形成するものではない。現実性関係は、時間的秩序に組み入れられた個別的対象の間にのみ成り立つ関係である。 p108

・連想的直観の統一

反復可能な意味内容に基礎をおく。

（反復）

内的時間意識に基づく

対象の意味内容の結合

意識全般にわたる結合の可能性を意味する。

・世界時間による統一

時間の一回性のなかに、時間内容を個別化していく生成のなかに基礎をおく。

（生成の時間性格を持つ）

世界時間に基づく

対象の現実性として対象の存在の制約

現実性の意識（措定的意識）のみに関わる結合の可能性を意味する。

・現象学の受動性の現象とは、意識の自己結合のための統一化機能の現象であることがわかる。

- ・コギトとしての対象構成的な客観的意識以前に、いつも「すでに先所与的なもの」が統一的に与えられ、意識もそこに集中的に統一されている。いま働く意識とともに意識の全関連が受動的に共働しているわけである。 p109
- ・志向性はいつもすでに機能を果たしているが、それはこの受動的な志向性機能の働く次元で見出される。
- ・受動性とは、意識の深層の最も包括的な構成機能。
- ・受動的現象は、時間の根源的機能を基底としている。連想機能が意識時間を基底としているのに対し、世界時間による対象の個別化や関連づけの働きは、自然の時間機能である。
- ・もともと受動性の問題論は、ヒュラーの現象学的分析にほかならない。ヒュラーに関する分析は、フッサール解釈の重要な鍵。なぜなら、連想による対象意味の先構成は、意味としての先構成であり意識の歴史性に深く根差すものであるが、知覚における「先所与的なもの」の現実的な先構成は、いかなる歴史的発生にも先立っている自然の先歴史的根源性を表すものだからである。（ここにいたって、現象学的分析論において「世界」がいかに主題化されているかを問うことができる。）

三 現象学的世界論 一 根源的自然の発見 一

1 世界地平

- ・（フッサールにおいては）意識の分析へと急いだため、・・・世界および世界意識の解明が現象学的分析全体のなかで明確な位置づけを獲得しなかった嫌いがある。・・・しかし、諸論考は、分析論の内部において世界の問題が最も核心的位置を占めざるをえない事情を告げている。 p110
- ・自然的態度から超越論的態度への態度変革にとって主題となる世界概念と、経験の分析において地平現象として発見される世界の概念とを、「現象学的還元の理論」において、ひとつの主題へと収斂（しゅうれん）させてみると、世界概念が重要な働きをもってくるということである。（それは、現象学の根本性格を改めて決定してくる。） p111

- ・経験の考察は、同時に経験における地平の現象の解明である。（前章の考察）
- ・知覚物は、一面的に、または一部分契機によって規定される。つねに、まだ規定されていないが規定可能である側面、または契機を残している。この「規定可能的不規定性」の地平に働くのが類型的予料である。経験の連續的連関は、予料一充実の連續的流動過程である。
- ・この予料は、つねに過去に沈殿した意味の受動的再生に基づくものである（「未知性は既知性の様態である」）。
- ・知覚物の予料地平は、内部地平（同一物を内部（側）から規定していくときに伴う）と外部地平（知覚物を随伴客体から規定していくときに現れる）にわかれる。ともに「既知性と未知性の領野」として意識の規定関連に相関的に現象している。 p112
- ・外部地平は、指定された対象を中心にして周辺に拡大する「随伴客体の開放的無限」の地平。これを次第に拡大していくことができ、最後に「時間空間性の開放性地平としての世界の地平」を極限現象としてもっている。
- ・地平現象としての世界は、経験のたびにそのうど相違する個々の経験対象とともに「いつも、すでに」現象している。（目の前の机の外部地平としてのこの部屋→この部屋の外部地平としてのこの家→この家のまわりのこの街 というように拡大されて、世界が極限現象としての地平として見出されてくる。）
- ・「すべてのものは、世界の地盤のうえで触発してくる」（「地盤現象」としての包括的地平性格が経験対象の地平を支えている）。

- ・世界の存在は、自然的態度では、それ自体視向の対象となりえなかった。現象学的分析によってはじめて地平現象として姿を現す。
- ・Fによれば、世界地平に相関して世界の存在を信念する世界意識が働く。
- ・世界意識は、個々の経験における一定の作用のように対象の存在を信念する客観的意識ではなく、それらの作用の根底に働く受動的信念である。「すべてのものは、信念確実性における世界意識を前提としている」。 p113
- ・「全体としての世界は、いつもすでに、受動的に、確実性において前もって与えられている」。そして、発生的には、全体としての認識の方向よりは、個々の存在者への方向がより根源的である。
- ・世界地平は、個々の外部地平と同様、「不規定的規定可能性」の性格をもつ。「世界の基底構造は、既知性と未知性の構造である」。Fは、世界現象を、個別的にそのつど相違する外部地平とのアナロギーにおいて理解している。（しかし、ここに重大な問題が隠されている。）
- ・外部地平の「極限現象」である世界地平は、もはや外部地平とは異次元のものではないか？世界意識は、存在の信念の意識であり、現実性の意識であり、意味内容獲得の現象とは相違するものではないか？ ということである。 p114
- ・世界地平および世界信念の受動的現象の発見こそ、「わたしは在る」のデカルト的明証に基づく近世意識理論の限界を越えてゆく出来事であったと言ってよい。
- ・自然的態度において働く世界存在の自明性の現象（わたしに対してもすでに単純にそこにあるという現象）は、世界地平の受動的原信念がつねに働き、世界地平が諸々の地平を越えて「いつもすでに」現象していることに由来している（超越論的理由を持っている）。 p115
- ・個々のものは「世界の接断面」にすぎないが、世界はそれ自体としてこの接断面においてのみ自己を告示し、全体的には、共妥当の仕方でのみ、つまり絶対的地平としてのみ現象する。
- ・世界地平は、つねに開放的無限性をもって「決して完結することのない地平」であることによって、個々の地平に先立ち、それを越えて現象する。

- ・G・プラント（以下プラントの解釈）は、「世界は諸地平を越えて地盤としてあるとともに目標としてある」とした。また、Fが世界の独自性を「超越」という語で捉えたことを指摘し、この世界は一種の世界-直観であると言っている。つまり、個々の経験とともに働き、かつまた先行的である世界投企の働きをそこに見ようというわけである。
- ・たしかに、世界地平および世界信念の受動的現象は、世界投企の性格を持つ。プラントによると、世界投企は自我の超越としての運動であり、この運動は、諸々の地平を連続的に世界へ向けて越えていく自己超越の運動である。自我が、個々の存在者に先立って世界を地盤としてもつからこそこの運動は可能となるのであり、自我のこの世界所有は自我の「わたくしはできる」という能力である。 p116
- ・自我が世界を所有するからこそ、個々の経験がたえざる変化交替にもかかわらずひとつの調和性へともちこまれるのであり、その限りにおいて、世界は存在意味を保証できる能力だということになるだろう。
- ・（世界は自我の能力だが、）世界が自我の素質として、自我に属するということではない。自我と世界とは相属的な連携を形成しており、「世界は自我に対してのみ存在し、自我は世界の内にのみ存在する」。この相関的共属関係は、「世界経験的生」として意識生の本質である。
- ・世界経験的生の働きは、たえず世界へ向かって自己を越えていく自己超越の運動である。プラントは、「世界の内の自我」の「内（イン）」は、自己自身とすべての存在者とを世界へ向けて超出していくことを表わすと言っている。

・プラントは、世界経験における自我の脱自-存在を、「自己疎外の自己遂行」と名づけ、自我が異質的なものへ向かって本質的に自己自身を脱し、自己自身を疎外していくという運動とともに、この脱自-存在において異質のもののうちにあるという二重の意味をもつと述べた。 p117

・世界意識は「最初の不動の確実性」であり、いつもすでに先立ってあるが、世界親和性は「よそよそしきもの」である。超越はこの異質のものを既知化していく可能性である。世界は「未知性および既知性の連続的転化の可能性」であり、超越の運動はこの未知性のうえにたっている。

・世界は、個々の存在者を既知化するとともに、つねに未知性にとどまっている。「すべての存在者は、世界の親和的未知性を基礎にしてのみ自己自身において自己を示す。存在者は自己自身において自己を示すことによって、まだ意識されていない未知性とは本質的に異なる恒常的未知性のうちにある。存在者は、根源的な自己自身を示すことにおいて、総体的既知化を排除する」。

・プラントは、世界地平を、単なる外部地平とは異質なものとして、自我の超越の目標であるとして解釈することで、・・・一切の志向性の成立の可能性の根拠となることを論じた（世界は単なる客体化された意味形象ではなく、客觀化の条件である）。世界は「投げられたもの」として、いわば意味の全体の先行現象として理解されている。 p118

・しかし、世界の「いつも、すでに」いう先行現象には、世界投企とともに働く世界受容という事態が読み取れはしないだとうか。知覚の時間的直観的統一として働く自然時間の根源的機能は、現実性の連関を形成する働きとして、意識に受動的原信念を起こさせるものではないのだろうか。

・Fによれば、信念意識は、・・・対象が現にあるという意識である。知覚などの措定意識において、志向的対象の充実によって、対象が「いま、すでに」あることが確かめられる。ところが受動的原信念は、世界がそこに「いつも、すでに」あることを確かめさせられている意識である。この確証は、・・・意識が措定に先立って受けとる確証の意識である。

・意識に世界の存在を信念させるのは、ある意味では世界の側の動きである。知覚的直感の統一が可能となるのは、世界が意識に浸透してくるからなのである。受動的原信念の受動的の意味は、この受容の意識であることを表している。（世界の現象にハイデッガーの言う「世界投企」の存在論的意味を見出すのは、誤りではないが、一面的である。むしろFが大地の名で呼んだものに相当する。） p119

・世界投企の自己関連を支えるのは、この世界受容である（ハイデッガー的に言えば、「情態性の現象」である）。

・「自然の自体存在は、先科学的経験への、（そしてあらゆる科学に先立つていつもすでに理解されている世界構造への）還元によってのみ見出される」（ラントグレーベ）。ところが、この「先科学的経験が自然の存在として経験せるものは、主観の形成的能動性へと還元されることはない。それは、世界に不可分に属し、存在者のただなかで、その情態性を性格づけている人間的存在の措定契機として理解されねばならない。・・・自然ははまず、人間を担い、同時に人間に反抗している大地として現われる。」（これは、Fによるコペルニクス的転回の逆転回）

・この根源的事態は、存在の秘匿性を表わす大地と、存在者の顕現性を表わす世界との、抗争的相属（ハイデッガー）に相当する。自ら隠れることによって存在者を存在者として在らしめる存在の根源的働きは、意識によって形象化された世界の背後に身を隠しつつ、意識の対象化を促してくる大地の自己を送る働きといえるであろう。 p120

・Fによって示された世界の問題論は、・・・意識の分析論の枠内において、存在の根源的動向を示唆するにとどまっている。（遺稿においてFは、大地は、あらゆる生と存在とに対してすべてを担う「母なる根拠」とよばれ、さまざまな周囲世界の根底に見出される故郷地盤として語られ

る。) しかし、(大地は) 意識の超越論的分析論のなかでは、それ自体対象化されることなく対象化を可能とさせ、対象化によって自己を隠す根源的自然の現象として姿を現わしている。そして、(大地の) 自己を送り込む働きが、自然時間によるヒュラーの受動的構成に見られると考えられる。

・フィンクは、Fにおいては、「地平が世界に基づくのか」あるいは「世界が地平の現象に基づくのか」が決定的回答を見いだしていないと指摘する。しかし、『経験と判断』では、地平が世界に基づく事情が十分に読み取れる。(Fは、(その後) この分析の成果を生かしていない。世界が、単なる意味所産であるという前提のもとに展開されていく自己解釈がこの成果を蔽ってしまうのである。) p121

・Fのプログラム的自己解釈と実際の分析の成果との間にはズレがある。このズレがF自身に動搖として現われた。この動搖はどこに由来するのか確かめておく必要がある。

・世界が意識による意味所産なのか、それとも意識に吸収し尽くせないものなのか、という解釈を二分する問題が、じつは、受動性現象の二つの型、意識時間を根底とする意識の自己統一と、自然時間に基づく意識の統一とには現象上の基盤を持つことを改めて指摘しておきたい。

2 世界存在

・トイニッセンは、Fの分析から世界地平と世界存在との差異に関心を示した。世界地平と世界意識とは区別すべきであり、世界地平への志向と世界の存在の普遍的意識とは区別されねばならない(とした)。 p123

・トイニッセンの言う存在意味としての世界は、プラントのいう超越の目標としての世界地平とほぼ同様のものを指している。世界意識がもはや地平志向としてではなく、存在一般の先理解として働くのだとすれば、世界意識を地平意識から区別すべきであるというのは、傾聴に値する。

(トイニッセンは)存在者全体は地平現象であるが、存在そのものは、存在者全体としては現象しない。(存在は)意識によってまず志向されているという。 p124

・だが、(プラントやトイニッセンのように)世界意識を存在理解としての世界投企として解釈していくかぎりは、世界意識の信念的性格のもつ受動性の意義を十分に捉えているとは言がたい。

・世界投企は、意味志向の可能性の制約として機能する存在理解の働きであろう。しかし、それはあくまで意識の側からの意味投企なのである。ところがこの意味投企を促し、意識を世界へと向かわせるのは、意識ではないし、意識から独立した世界自体でもない。

・意識と世界とは根源的な相互浸透の関係にあり、促しと回答が同時的に生起しているとみなすべきである。

・世界は意味として意識によって構成される。しかし、その存在は意識からあたえられるものではない。構成に先立って意識に自己を送り込んで、意識によって自己の対象化を促す働きにおいて示される。

・対象化を促す働きは、「見えない」根源的自然と意識の出会いとして発生する。(根源的自然)は、意識に受動的に現象するかぎりにおいて意識によって受けとめられている自然である。根源的自然は、自然的態度では、「見えるもの」として対象化された自然によって、つねに隠されている。 p125

・Fにおいては、大地-世界の根源的相属関係は、自然と意識との相互浸透の原事実としてとらえられた。この相互浸透の事実から、超越論的生を世界と自己との相属性をその本質とする世界経験的生であると解釈し、現象学的還元を実存論的に解釈していくこともできるし、ハイデッガー的な存在の思想への方向を読み取ることもできる。

- ・だが、この現象の解釈は、ヒュラーの問題論や身体論、理性の目的論の検討と関連を持っている（身体論、理性の目的論は後で説明される）。意識の「原初的現在」の理論にも関わっている。とくに「第三の自然」、自然の「暗い基底」（後で簡単に説明される）として、従来の哲学が見逃していた重要な次元を語りだそうとする。 p126

第三章 人間存在の問題

一 人間的主觀性の構成 一人間と理性のパラドックス

1 自然と精神

- ・超越論的主觀性は、世界を構成的生の契機とする世界経験生（世界を直接触れて把握する生）
- ・超越論的主觀性は、意識の純粹な機能として人間の生の核心において働く統一的な理性
- ・Fは、超越論的主觀性をそのまま人間的主觀性と同一視することを避けている。そこで、Fが「人間的」主觀性をいかに考察していたかを、問うことにする。 p126

- ・人間の問題が問われるのは、まず領域構成の問題論である。領域とは、多数な存在者を区別する存在者の本質区分に関する根本カテゴリーの概念である。 p128
- ・領域存在構成および領域存在論などの構想は、『イデーン』期に特有の考え方であって、「すでに展開しきってしまった主觀性を前提として」展開される構成的研究である。しかし、Fの現象学を理解するうえでは重要な意義をもつ。（表）
- ・領域構成論では、質量的自然是世界構成の最下の段階として、他の領域は質量的自然によって「基底づけられた」高次領域として考察されている。（「精神」の領域は、精神的人格的志向作用が、知覚物を意味基底とする有意義作用であるという意味で、基底づけられている。） p130
- ・世界内属的主觀が超越論的主觀性の自己構成態であるかぎり、心も精神（人格）も、世界に内属する主觀である。（しかし、自己構成態が超越論的主觀性によって超越論的に構成された意味所産であるとすれば、問題がある。）
- ・心的主觀も精神的主觀も、世界の内に組み込まれる条件は身体との結合によるものとされ、身体をとおして世界の内に位置づけられ、意識時間と世界時間と合致対応する。（身体は、主觀の世界化の条件）
- ・心的主觀性は身体との間に精神物理的依存関係を有し、身体が自然関連に所属することによって自然関連に条件づけられ、客観的世界の成員と化する。
- ・精神主觀性は、志向的コレラートである周囲世界の中心に据えられた身体との恒常的機能関係をもつとされる。
- ・存在領域を異にする両者の相違は、身体との結合の仕方が精神物理的か志向的かの区分による。（しかし）結局それは、二領域の考察の仕方の原理的相違に基づいている。
- ・Fは、自然物を単なる物件として扱い、すべての精神的述語を一貫して無視する態度を「自然主義的態度」とよび、精神的世界へと向かう「人格主義的態度」と区別する。 p131
- ・人格とは、周囲世界の中心にあって周囲世界を「自己に向き合ってもつ」ことによって、それへの関心に生きる志向的主觀性であり、この主觀性を主題にする態度が人格主義的態度である。
- ・自然科学の基づく自然主義的態度は、周囲世界に属する自然領域的対象性だけを主題とする。
- ・二つの態度は（同等ではなく、）ともに人格的主觀の態度なのであり、人格主義的態度は、自然主義的態度の主題である自然を志向的周囲世界に編入し、自然主義的態度を自らに包摂できる。
- ・人格主義的態度の優位性が語られるとき、・・・一種の絶対的觀念論が表明されているように見受けられる。『イデーン』IIが扱ったのは、「客観化された自然」であり、意識は「客観化的統

覚であり、受動性の層における意識が自然との関係において主題になっていないからである。もし受動性の意識を問題にすれば、この包摶関係は簡単には成立しない。 p132

・だが、受動的自然の次元を承認したうえで対象化された意味所産としての自然だけを取りあげるのであれば、この優位的包摶関係についてのFの洞察は優れた洞察と言える。

・客觀化された意味形成体は、当然、客觀化的機能としての精神を前提としている。そのかぎりでは、「自然科学の成果である自然は、それぞれの時代の世界像として、精神科学の内部に包摶される」のである。

・しかしFは、客觀化されえない自然をもこの著作で扱っている。『イデーン』IIの功績は、身体の問題によって存在層の絶対化が不可能であることを明示し、普遍的な自然化の限界を示したこと（ラントグレーベ）にある。

・身体論の前に、精神の名で呼ばれる人間存在についての、Fの理解にふれる。

2 人格と他者

・「精神」領域における人格的主觀性は、日常的生活に生きる経験的主觀を意味する。さまざまな事情のもとでそのつど前もって与えられるものに向かって行動する志向的主觀としての人間が「人格」の名で呼ばれる。人格は「純粹に絶対的に自己を告示する統一」つまり自己統覺をとおして自らを統一していくものである。 p133

・この統一は、現象の多様性からの統一ではなく、「生の流れの内で構成された統一」である。自我は、「他のすべての統覺とひとつになって自己ををともに構成し形づくっていく自我」。他者への関係をそこに含むことで自己を人格の名でよぶわけである。

・人格の中核には（告示しない純粹自我である）コギトの純粹主觀が「すべての告示の非実在的な担い手」として働いている。

・人格的主觀は、周囲世界との相関的な志向的関係に生きている。能動的、受動的、受容的な種々の働きを持つ自我が、周囲世界から触発され、それを客觀的に構成していく。

・周囲世界は、最下に物を基底として、種々の高次対象（たとえば文化現象）から形成されている。周囲世界は、わたくしに対しての周囲世界であり、決してそれ自体では存在しない。 p134

・周囲世界には、触発ではなく、動機づけの関係をとおして働きかけてくる他者としての人格が属している。周囲世界は、主觀結合的な社会的周囲世界であり、多数主觀によって構成されたイデアルな世界でもある。間主觀的に構成されたこの高次の周囲世界は、わたくしにとってだけの周囲世界が個別的であるのに対し、客觀性を持つ。

・Fによれば、人格は、理性と感性的基底との統一として、はじめてまつたき人格性としての個別性を持つ。本来の人格は、態度決定の主体としての自由な理性の自立性であるが、自然我である感性を「暗い基底」して、これを経験的に統一したものが統一的人格である。

・自由な態度決定の自我は、理性の動機づけに生きる自我であり、自己責任的であるという点で人格である。決して受動的になることなく自己自身から決断していく自我である。

・それに対し、基底となる感性は、精神の内に組み入れられた心であり、受動性の層を表わす。非本来的志向性としてのこの受動的基底は、原的感性としての印象（感覚与件）を原的所有として、第二次的感性としての連想を第二次所有としてもつが、この連想は「精神的生を貫いてとどまる暗い規則」として習慣を形成している。

・以前の理性体験は生の暗い層に沈殿し、そこから働きかけてくる、人間は、以前と類似の状況におかれると以前と類似の行動に誘われるが、やがてひとつの傾向が習慣として働くようになる。人間の行為の「動機はしばしば深く隠されている」。 p135

- ・具体的な人間の行為は、自由な決断と習慣的傾向との混じり合ったものとして成り立つ（理性の自由な決断は個性的）。Fは、こうした統一的人格を「能力」の概念で規定する。理性動機に従う能力は、その人間に固有の素質、属する年代などによって類型的様式をもつ。
- ・「精神的自我は能力の有機体である。・・・能力は、積極的な潜在性であり・・・つねに待ち受けて行動性へと移る。・・・結局、すべては主観の原能力を溯示し、そこから以前の生の顕在性から生じた獲得された能力を溯示する」。
- ・間主観的共同的周囲世界とか、それに属する他者というが、他者はいったいかにして構成されるのか。Fは、他者についての経験を感情移入または代現（レプレゼンタチオン）の方法として解明している。 p136
- ・この方法は、自我の身体と類比的な物体として現われる他者の身体を介して、他者の自我を構成していく類比的把握である。他者の身体がわたくしの身体とともに、自我の第一次的周囲世界に現われ、わたくしの身体の定位零点の「ここ」に対して「そこ」の関係をもって与えられると、「そこの様態で共在するエゴ」として身体を介して統覚を受ける。
- ・感情移入は再現前化（想起）と類比的に考察される。他者を他の自我のとして措定するのは、自我が過去の経験を現前化して・・・過去の自我を現在の自我と同一の自我と確認するのと類比的であるという。（身体は自我を志向的に溯示）
- ・他者経験の解明は、超越論的主観性が普遍的客観的世界を構成するために間主観的性格をもたねばならないとう問題にまで深められる。（超越論的他我の超越論的構成の問題として展開されねばならなくなってくる。）
- ・結局、超越論的自我一般ということを言いだすが、方法的に難点を残している。・・・再現前化も感情移入も、時間的にあとからの確認にすぎない。確認された自我はつねに時間的に変化した自我にすぎず、超越論的共在への道は塞がってしまう。（身体性を超越論的事実性の次元で扱い他者との超越論的共在が解明されれば、また、他者経験に先立つ他我との共在を体験構造的に解明されれば、解決する。） p137
- ・把握に先行している同一的または共在的自我を非措定的先措定的に理解する可能性が成り立たないかぎり、説得力のない空弁に陥ってしまうであろう。ただ、先把握的理解の方法は、最晩年の「生ける現在」の分析に示唆される。（これは第五章で説明される）

3 身体の二重現象

- ・身体は、世界内属的主観である心や精神を世界の内に位置付ける働きをする。しかし、心と精神では、身体と結合する仕方が相違している。心の場合は身体との精神物理的関係が、精神の場合は身体を周囲世界の中心にある志向的所産としてこれとの志向的恒常的関係が、それぞれ固有な結合関係とされている。
- ・しかし『イデーン』IIの「精神領域」の考察では、構成された身体と構成する精神との結びつきの仕方を、身体を志向的所産とすることによってかえって不明に陥らせている。ところが「心」の考察における身体の分析は、主観的-客観的-二重性格に基づく身体の媒介的機能の問題論の萌芽を含んでいる。 p138
- ・「心」的領域の考察によると、身体について内的観方と外的観方が成り立つ。第一に、身体は知覚器官をとおして物知覚の常態性として働く。しかし、身体の最も注目すべき役割は、感覚の局所づけの現象および自由運動の担い手という点に見いだされる。口カリザチオンとは知覚において感覚が対象に「一緒に立ち臨む」現象のこと（触れる手は、触れられた空間物体の位置において触感覚を持つ）。この現象を、感覚が身体において局所づけられているという（Fは、局所づけられた感覚を「感覚態」と呼ぶ）。

・知覚において物と感覚との共在を示すのは、触感覚であり、触感覚は「身体構成にとって根源的役割」を果す。局所づけの現象は、感覚が外的客体の徵表であるのみならず、身体という客体の感覚であることを示す（あるものの感覚であると同時に自己感覚を持つ）。 p139

・「身体は根源的に二重の仕方で構成される」（身体は、物として構成されるが、感覚するかぎり、物として構成されたものではない（実在的な物の性質は射映多様性によって構成されるが、感覚態はそうではない。また、空間の延長の位置性に感覚の位置-要素が対応している。）

・身体は、さらに、意志器官として自我の自発的意志による自由運動（キネステーゼ）の担い手となる（身体の自由運動を運動感覚=キネステーゼとよぶ）。

・Fは、空間的な遠近法的現出の中心点を示す身体固有の性質をとりあげる。身体が中心点「ここ」（定位零点）となり、他の物は「ここ」への関係における「そこ」として中心への定位秩序におかれてくる。 p140

・ところがこの定位零点もまた、自由運動の能力によって、空間点としてその交換が可能となる。また、ここに存在している各主観相互間にもこの空間的交換が可能となる。

・身体が外界と主観の接点として、因果関係を条件関係へとおきかえ、精神物理的関係へと編入していく働きなどが考察される。

・「精神」領域においては、主として表現をめぐって、言語統一、人間統一および他者への感情移入などが身体の役割として記述されている。しかし「心」の領域で扱われた身体と主観との結合に関する諸成果がそこに生かされているとは言いがたい。（ロカリザチオン、自由運動、定位零点などの現象は、精神の考察でも生かされるべきである。） p141

・Fが志向的機能に対する身体の役割を正面から論じたのは『危機』のキネステーゼ論である。

・キネステーゼの概念は、運動と感覚との二契機からなっている。触感覚が現出物の位置において「一緒に居あわす」ことは、位置の感覚が自己-感覚として与えられていることである。この位置感覚は、現出物の性質を構成する形姿感覚（アスペクト与件）とともに空間物の感覚であるが、位置感覚は身体運動の能動性によって自ら運動するところの感覚となる。 p142

・知覚に現出する物体のアスペクト示現とキネステーゼは並列的ではなく、共働していて、その結果アスペクトは存在意味だけを、物体のアスペクトとしての妥当だけをもつ。

・感性は、物体現出の連続的連関としてだけではなく、キネステーゼ的に機能する身体性と結合している（身体は自由運動の担い手であるとともに、すべての受動性の担い手でもある）。

・身体は空間的存在者として、物体的にキネステーゼによって構成されるが、構成するキネステーゼは、構成される物体としての身体とはみなされない。キネステーゼ（運動感覚）は、物体的に自己を示現する身体運動からは区別されるが、実際はそれと独特にひとつになっていて、この二重性における自分の身体に属している（内的キネステーゼと外的物体的に実在的である運動）。 p143

・このヒュラーの担い手である身体の二重性が、ヒュラーのもつ媒介的機能の謎を解く鍵となっている。クレゲネスは、この身体の媒介機能を「自己自身を媒介する直接性」と規定している。

・自我は身体と同一的であるとともに身体から区別されている（外界への関係では同一的、自己自身への関係においては区別されている）。

・キネステーゼ的意識は「自己自身を感覚する意識」として「わたくしは動く」という自己意識を伴う。そうすると、定位零点としての位置感覚は、わたくしがいまここにいることの直接的同時的自己意識となる。

- ・キネステーゼ的意識が世界意識にその構造契機として含まれていることが発見されてくる。世界意識は「世界が在る」ことへの受動的意識であると同時に、世界の内に自己自身がおかれていることの受動的自己意識なのである。 p144
- ・キネステーゼ的意識は自己意識なのであり、世界意識と身体意識と自己意識とがそこに集中している。
- ・キネステーゼ的意識が領域的考察において十分記述されなかったのは、キネステーゼ的意識は、超越論的反省においてはじめて自己を示す世界意識の構成要素として、超越論的機能の制約となる受動性の次元に属しているからである。

—今回はここまで。このままでは内容的に中途半端なので、次回第四章を飛ばして第五章までやります。—